KAPPA NOVELS

長編推理小説

考える葉

松本清張

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども、お書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　考える葉

昭和37年5月15日　初版発行
昭和50年9月10日　112版発行

著者　松本清張（まつもとせいちょう）
東京都杉並区高井戸東 1-22-3

発行者　小保方宇三郎

印刷者　鈴木貞三郎
東京都文京区水道 1-2-1
公和印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替東京115347
株式会社　光文社
電話 東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（複本製本）
表紙の模様・意匠登録　116613　© Seityō Matumoto 1962

(分)0-2-93(製)03011(出)2271 (0)

長編推理小説

考える葉

松本清張

カッパ・ノベルス

目次

第一章　夜の銀座で……五
第二章　臨華荘の主……三四
第三章　硯の村……六二
第四章　兄と妹……一〇八
第五章　浮浪者の死……一一六
第六章　暗殺……一五八
第七章　罠……一七二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

第八章　誘拐……二〇一
第九章　ある因縁……二三六
第十章　考える葉……二七二
第十一章　対決……二九八

本文のイラスト　小松久子

第一章　夜の銀座で

その男は銀座を歩いていた。

彼は、三十五六ぐらいに見えた。大きな男で、体格がいい。薄ら寒い宵だが、オーバーも何もなかった。くたびれた洋服を着、踵の減った靴をはいていた。ネクタイは手垢で光り、よじれていた。だが、彼は、伸びた髪をもつらせ、昂然と歩いていた。すれ違った者が思わず顔をしかめたのは、その男の吐く息がひどく酒臭かったからだ。

夜の八時ごろというと、銀座は人の出の盛りである。四丁目の交差点から新橋側に歩き、さらに最初の区画を右にはいると、高価な商品を売ることで名の高い商店街がある。

どの店もしゃれた商品をならべ、通行者の眼をウィンドーの前にひいていた。品もいいが、溜息が出るほど高い正札がついていた。

この通りをどこでもいいが、左に曲がっても右に折れても、夜の銀座の中ではいちばん人の歩きが多かった。

バーも、キャバレーも、ナイトクラブもある。それに、呉服屋も、洋装店も、食料品店も、割烹店も、レストランも、とにかく、あらゆる銀座らしい店がこの区画に集まっていた。

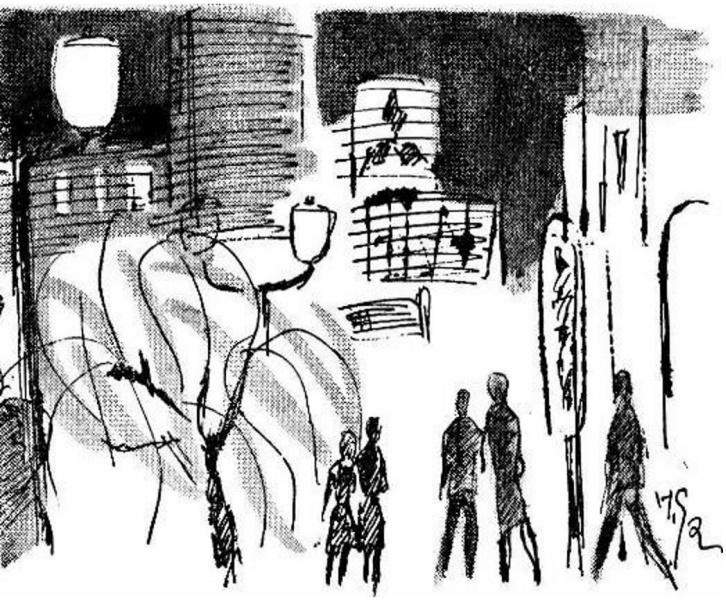
歩道を流れている人々の全部が、それらの店に用事があるのではなかったが、見ていて、いかにもそれらの高級な店のどれかに係りがありげだった。

群衆のことごとくが贅沢な身なりでないと同様に、ことごとくが愉しんでいる顔でもなかった。が、一つの流れの雰囲気の中に誰もが溶けこんでいた。ネオンの灯が重なりあい、花売娘が軒の下を歩いている通りなのである。

その男は酔っていた。

手にステッキを持っている。酔って脚が少しもつれているので、ステッキはその支えかと思われた。樫の太い棒だった。

ところが、物騒な話だが、実は、彼はその棒で誰かを殴るつもりでいた。特定の人間ではない。気分で、歩い



ている誰を殴ってもよかった。当人にとって、これは愉(たの)しい話である。

たとえば、向こうから来る気どった貴婦人の頸(くび)にいきなり抱きついてもよければ、自動車(くるま)から降りたばかりの社長らしい男の肩を殴りつけてもよかった。実際、彼の眼はそれを物色していたのである。

いや、人間だけではない。店舗に堂々とはいり、平気で、陳列の商品に泥をかけてもよかったのである。彼は完全に現代の法律の外に立っていた。これは強い。恐れるものがないのである。

このような意識は、誰しも空想するところである。だが、彼は本気にそれを実行しようとしていたから、瞬間の空想と違って、その愉しい興奮は長づづきしていた。

折りから、彼の歩いている前を、二人連れの男が女給に見送られて出てきた。バーの前だったが、賑(にぎ)やかな歩道で、カクテルドレスやしゃれた和服の女が五六人もかたまって、客の乗る自動車の傍(かたわら)で笑い声を立てていた。

その男の前に偶然立った女が災難だった。彼は背中までむき出ている女の白い皮膚をいきなり片手に巻いた。

カクテルドレスの女は悲鳴を上げた。男の黄色い歯が

彼女の白い肩を噛み、汚ない唾を残したのである。
悲鳴は、当人だけでなく、周囲の女からも上がった。
自動車に乗りかけた客が気色ばんで出てきたとき、男は二メートルも向こうを一人で笑いながら歩いていた。相手が悪いと思ったか、それとも、とっさの思いがけない行動に気をのまれたのか、こちらがかえってしんとなって見送ったのである。
男は角を曲がった。あとも振り向かなかった。後ろから迫って走ってきた通行人数人が、その幅の広い男の後ろ肩をかえって呆れたように見送った。
男は新しい人通りの道を歩いた。何も知らない通行者が、彼の前に何事もなく群れ過ぎる。
着飾った女性の一群がいた。
男は、彼女らに眼を据えたが、何もしなかった。そのまま眼を逸らせて行き過ぎた。
そこにもバーがつづいていた。
「おじちゃん、」
灯の暗いところで小さな女の子が呼んだ。ネッカチーフをかぶり、花束を抱えている。
「これ買ってよ。」

酔った客だし、近くがバーなので、これはいい客と思ったらしい。
男は素直に百円玉を出して、それを買った。
片方ではステッキを突き、片手にその小さな花束を提げていた。
前面から女給のような女といっしょに若い男が来た。髪を縮らせ、外国の兵隊外套のような格好のトレンチ・コートを着ていた。煙草を横ぐわえにし、気どった足どりで歩き、役者のように特別な表情を作っていた。
「君」
彼は青年に呼びかけた。青年は、突然、花束を突きつけられて立ちどまり、眼をむいた。
「これを上げよう。」
酔っていると知った青年は、眉をしかめて口だけはわらった。
「いや、いいんです。」
行き過ぎようとしたのを、片腕を強引に捉えた。
「志だ。取ってくれ」
強い力である。よろよろしたのは年齢の若い青年の方だった。
彼は青年を引き寄せると、外套の肩に軍人の肩章のようにのせている飾りの穴に花束を突っこんだ。
「似合う。」
少し遠い眼つきをして鑑賞するように言ったものだ。
「ヘイ、大尉！」
男は持ったステッキを儀仗兵のように捧げた。
青年は赤くなった。殴りかかろうとしたが、相手が悪いと思ったか、唇をかんだ。
「この肩章は、ずっとつけておきたまえ。」
青年が片手でむしりそうなので、男は睨みつけた。
「ぼくの見ている前でこれをはずしたら、承知しない。ずっとこのまま歩きたまえ。」
事実、後ろから仁王立ちになって監視したものである。
青年は連れの女と小走りになった。正直に花束を肩にのせたままなのは、男が、実際に棒を振り上げて迫ってきかねないからだった。
「酔っているんだ。」
と、青年はてれくさそうに女に言った。
肩には花束がきれいな色で咲いている。通行人が呆れて見送った。

青年は街角を大急ぎで回って、初めてそれを除った。
「あんた、意気地なしね。」
女が横を歩いて言った。

男はそこを歩き電車通りに出た。左右を見まわした。もとの街路に戻った。

この辺は、大きなレストランや、キャバレーなどがある。人通りは前よりふえていた。道の片側には、高級車が列を作って駐車していた。

歩道には、店舗から流れる明かるい灯が、日光のように斜めに射している。

そのとき、男が立ちどまって眼を凝らしたのは、先方から歩いてくる見事な女性だった。

髪の色は燃えるように赤いが、むろん、細工したものだ。白い頸筋には真珠が四重にも巻きついている。服飾雑誌のデザイン画そのままの姿で、これは行き交う女性たちが振りかえって見るくらいに目立った。

女は、はたの凝視を意識し、それを無視して歩いていた。顔はまっすぐに上に向け、その歩き方は自分だけの道と心得ているようだった。睫毛が作りもののように長く、瞼が淡く青い。

男は微笑した。

女はまっすぐあるいてくる。そのままだと、そこに立っている男に突き当たらねばならなかった。たぶん、これまで、彼女の前に道をさけてくれるのは通行人の方だったであろう。

ところで、彼女は男の前に来たときためらいを起こした。棒を地面に立てて、仁王立ちしているのだから、逡巡するのは当然である。彼女は、初めて自分の方から方向を外れようとした。

そのとき、男は自分の身体を女の前に覆うようにして倒れかかった。人が川のように流れている中のできごとである。

女は声も立てなかった。周囲を歩いている人が歩みをやめ、その光景を茫然と眺めていた。はじめ、その女の知った人が、なにか冗談をやっているように思ったものだ。

男は容易に女を放さなかった。長い。

女の身体は、うしろに弓なりに傾いていた。長い間、そうしていた。また、長い間、見物人が黙っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

男は女の身体を放した。それから、自分の手の甲で唇を拭った。初めて、何が行なわれたかを通行人は知って騒ぎだした。女が顔を蔽って、そこにしゃがみこんだからである。

しかし、通行人は、しばらくは誰も彼を追う者はなかった。女は人々の輪の暗い中にうずくまっている。ゆっくりと歩いている男の後ろにも群衆との間に間隔があった。両方とも、そこだけが真空だった。

群衆は、なんだ、なんだと言いあっている。気違いだろうと答える者がいた。事実、狂人でなければ、できないしわざである。着飾ったトップ・モードの女性が、衆人の中で接吻されたのだ。見物人は肝を奪われたが、半分はおもしろがっていた。弥次馬がふえた。

男は一人で歩いて角を曲がった。

一流の品を陳列しているあの通りに戻った。

男は、ガラスの壁の前を歩いた。さまざまな色彩が、連なった店の透明な塀の中に咲いている。

弥次馬が彼の後ろに迫った。しかし、彼らは男との間に、相変わらず一定の距離をおいていた。広い肩だし、うかつに手が出せなかった。それと、これから彼が何をやるかという期待だった。騒ぎが起こるのは、はたの者にとって愉しいのである。

男は見物人たちの期待を背負っているようにみえた。何も知らない通行者は、彼とすれ違って、初めて後ろについている見物人に気がつき、その男を改めて振りかえった。

「気違いかな?」

「いや、暴力団だろう。」

「色気違いだ。今、そこで若い女の頸を締めた。」

「一一〇番を呼べ。」

しかし、誰も公衆電話に走る者はなかった。自分たちには被害がないのである。

男は、或る店のウィンドーの前で立ちどまった。

巨大なガラスだ。その中に、さまざまな宝石が並べられ、眩しい照明に輝いていた。陳列は凝ったものである。

また、陳列の半分は、半身のマネキンを使って装身具が飾り立てられていた。色彩の効果を考え、眼に贅沢な効果を狙った配列だった。

男は、それをしばらく眺めていた。

店の内では何も知っていなかった。店員が四五人の客

の応対をしている。事実、男の横をすり抜けて店内にはいって行く婦人もあった。
自動車が通り、人が重なりあって歩いている。事情を知っている群衆だけが、彼の様子を距離をおいて見まもっていた。男は、まだ、陳列の中をじっと見ていた。買物を選択する婦人と同じくらい熱心な眼つきだった。
ようやく、男は離れた。そのまま過ぎるかと思われたが、突然、ステッキが彼の肩の上に上がった。あっ、というまもない。一枚ガラスの広いウィンドーが爆発し、飛び散り、崩れ落ちた。

贅沢な犯罪である。見物人の眼が歓喜に輝いたくらいだった。
ガラスの壁は崩壊したが、男は開いた穴に手を入れて内の商品をつかむでもなかった。そのまま歩いて行くのである。前と多少違うのは、今度は大股だった。
店の内では、番頭たちが飛びあがっていた。二人の若い者が営業台を飛び越えて走り出た。
「あっちだ。」
見物人が指さして店員に教えた。

歩道は、店舗によって照明に明暗があった。男の姿はあいにくとその暗いところを通っていた。店員二人は眼を凝らして、靴下のままで追った。
「待て。」
と、一人が言った。
街角にかかった所で、男は振り返った。
「おれか？」
その顔が店員をたじろがせた。大きな男だし、太い棒を持っている。店員はうわずって、わけのわからないことを叫んだ。
大勢の見物人が店員のすぐ後ろに押しかけていた。
「一一〇番。」
店員が同僚に言った。
血相変えて、その男は店に走り戻った。
「用があるならついてこいよ。」
男は、残った店員に吐くと、背中を見せて歩きだした。
店員はそのあとを蒼い顔でつけた。姿を見失わないのが精いっぱいのようだった。
後ろの弥次馬は数を増していた。夜の銀座だし、ちょうど人の出盛りである。その黒い集団を見て、事情を知

らないまま走りこんでくる連中もあった。
こうして男は群衆を従え、街角を曲がり、喫茶店の前に出た。
彼は振り返りもせずにドアの前に近づいた。内側でドアに手を掛けている少女が、何も知らないままに、
「いらっしゃいませ。」
と、お辞儀をした。
男は客席についた。音楽が鳴っている。若い男女が茶をすすったり語りあったりしていた。
少女が水を運び、注文をきいた。
「コーヒー。」
と、男は命じた。
入口のドアの前は黒山の人だかりとなった。少女はそれを見て、はじめて狼狽した。
ようやく店内でもそれと気づいた客もある。また、勇敢な見物人はドアをあけてはいってきた。喫茶店だし、自分に係りあいがないかぎり、安全なのである。はいってきた客は、その男のすわっている席が見えるように、しかも、いざというときを考えて、距離をとってすわった。
男は、ゆっくりと茶をすすっていた。
入口のドアが、外の見物人の圧力で開いた。群衆がせりだしている。少女は悲鳴をあげて奥へ走った。
支配人も、レジの女も、少女たちも、はじめて事態を知った。客は総立ちになった。支配人が英雄的に、単身で、男に近づこうとした。
男は、コーヒー茶碗から顔をあげた。支配人は彼の直視にあって迷った。男が、膝の間に棒を立てているのだ。だが、支配人の困惑は救われた。
表にサイレンが鳴り、パトカーが到着した。群衆を分けて、警官が三人で店にはいってきた。
男はパトカーに乗せられ、所轄の××警察署に連れこまれた。
巡査二人が、男を両脇に抱えるようにして歩いた。がらんとした夜の署内では、三四人の巡査が、机に向かって何かやっていた。
「なんだア？」
その一人が、通路を通る連行の巡査にのび上がって、奥から声をかけた。

「暴行ですよ。」
「暴行？　何をやったんだァ？」
ほかの巡査も振り向いた。
「酔っぱらいです。銀座のどまん中で、通行の若い女にキスしたんです。それから、商店の大きなウィンドーガラスを、棒でたたき割りました。」
その棒は、一人の巡査が、小脇に証拠品として持っていた。
「なに、女にキスしたァ？」
署員の顔が、急に、にやにやと笑った。
「どんな女だ。別嬪か？　被害者は連れてきたかい？」
「被害者はわかりません。逃げたようです。」
「やれやれ、惜しいことをした。」
「当直の主任さんのとこに連れて行きます。」
男は、大きな身体をぐずぐずさせていた。
「歩け。」
巡査は、男の脇に挾んだ手に力を入れた。刑事課は、地下室にあった。薄暗い電気が廊下にぽつんと点いている。堅い急な石段を降りた。狭くて三人並んでは降りられなかった。
突き当たりの部屋に灯が点いていた。警官がドアをあけると、私服が四人いた。二人は将棋をさし、二人は本を読んでいた。
「なんだ？」
年輩の男が、本から顔をあげて闖入者たちを見た。
「暴行の現行犯です。今、銀座の街頭で乱暴をやったので、つかまえてきました。」
「ふん。」
私服は本を伏せた。
「ここに連れてこい。」
本を読んでいる別な男はちょっと顔をあげただけで、また眼を伏せた。将棋の二人は駒音を立てて勝負をつづけていた。
男は、その私服の前にすわらされた。巡査二人がその肩を押さえた。警官の一人が手短に男の犯行内容を話した。話を聞いている太った私服は、今夜の当直警部補だった。
「もういい、ご苦労。」
連行した巡査は、そこまでの役目をすませて帰った。
男は黙って警部補を見ていた。赤い顔だし酒くさかっ

た。
「女にキスしたそうだな？」
警部補は、薄ら笑いを浮かべながら尋問にかかった。机の引出しから書類を出して、万年筆で書く構えになった。
「おまえ、酒はどこで飲んだんだ？」
「おでん屋だ。コップで五六っぱい、ひっかけたかな」
男は横着げだった。酔っているだけでなく、性質がそのようにみえた。
「おまえ、自分がしたことを憶えているか。」
「わかっている。それほど酔っていないからな。」
被疑者の方が、よけいに笑っていた。警部補の顔が赤くなった。
「ばか者。」
彼はどなった。酔っているにしても、男の横着な態度が腹に据えかねた。
「名前はなんというんだ？」
警部補は睨んだ。
「ぼくかね？」
男はいっこうに反応を示さない。やはり、眼もとに笑いを残していた。
「ぼくは井上代造という者だ。」
「井上？　どういう字を書くのか？」
警部補は、男からいちいち字を教わって、書類に書き入れた。
「本籍は？」
「広島市荒神町。番地は忘れた。」
「ふむ。現住所は？」
「現住所は不定。目下、都内の宿屋を転々としている。」
「職業は？」
「ない。」
警部補は鼻をならして男の顔を見た。
「おまえ、どうして食っているんだ？」
「なんとか、やっている。」
「けっこうな身分だな。家族は？」
「独り者だ、これでも。」
「前科は？」
「ない。」
警部補は、そこまでの要点を書き終わると、本を読んでいる男を呼んだ。警部補は紙片を渡した。私服は黙っ

て部屋を出て行った。これは、男にはわからないが、本庁の鑑識課に問い合わせて、当人の前科の有無を照会するためである。

「おまえ、なんで通行の女にキスしたのだ、酒に酔って妙な気持が起こったのか？」

警部補は頬杖をついて男を眺めた。男は椅子に自堕落に掛け、やはり傲慢な顔つきをしていた。

「別に、妙な気持が出たわけではない。癪にさわったからだよ。」

彼は威張って答えた。

「あんな、傲慢な女を見ると、むしずが走るんだ。きれいな衣服に身を飾って、人を見くだしながら歩いている女の顔を見ると、何かせずにおられなかったんだ。これは、いつも思っていたことだがね。今夜は、ちょうど、その気持を爆発させるような女が、向こうからちょろちょろと歩いてきたので実行したまでだね。」

「ふむ、全く見ず知らずの女だね？」

「そうだ。むろん、どこの馬の骨だかぼくの知ったことではない。」

「思いきったことをしたものだ。どうだった、味は？」と警部補がきいたのは、その接吻のことだった。男は、ここで眼尻に少し皺をよせた。

「少し、塩っぱかったね。ぼくは、あの高慢ちきな女の口を、そうだな、五十秒ばかりも吸いつづけてやったかな。」

将棋をしていた二人が、手を休めてこの話に聞き入っていた。二人とも笑いをこらえていた。

「商店のガラスを割ったのは、どうなんだ？」

警部補は次をきいた。

「あのウィンドーに陳列している眼のとび出るような贅沢品を眺めているうち、また、むかむかとしてきたんだ。何万円もするような一枚ガラスを壁にして、貧乏人には、どうだ手が出まい、と言わんばかりに、仰々しく品物をならべているかと思うと、癪にさわってならなかった。だから、思いきりステッキで叩き割ってやったよ。その音を聞いたとき、実に爽快な気分だったね。」

「これだね？」

と、警部補は棒を見せた。樫の太いステッキである。

「そうだ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong